

巻頭言

異なる他者へのまなざし —文化多様性の保全に寄与する教育研究の課題—

金 龍哲（中日教育研究協会会長）

「人々について知りたければ、身のまわりを見まわすがよい。だが人間を知ろうとするなら、遠くを見ることを学ばなければならない。共通の本性を発見するためには、まず差異を観察する必要がある。」

フランスの社会人類学者クロード・レヴィ・ストロースが好んで引用したルソーの言葉である。他者を知ることを通して、もう一つの他者としての自己を発見する、これは彼の一貫した研究姿勢だった。もちろん、人類の自己探求の旅は今に始まったことではない。それは人類の誕生と歴史を共にする古くて新しい、しかも永遠の課題である。古代ギリシアの哲学者ソクラテスは、哲学探究の出発点を「汝自身を知れ」に置いた。道教の始祖とされる老子は「人を知る」ことを「智」と呼び、「己を知る」ことを「明」と呼んだ（知人者智、自知者明）。彼にとって自らを知ることの方が遥かに難しく、しかも重要な課題だったのである。

人間の集団は、各々の文化が持つ独自のパターン、コードやリズムを維持することを通して、集団内の共通性を強調し、成員の結束力を促す一方、自文化の特異性を強調するため境界性を設け、他者を遠ざけてきた歴史がある。集団間の文化的境界性が強まれば強まるほど、それを越えることが難しくなる。アメリカの文化人類学者エドワード・T.ホールは、異文化間の交流が日常的となった今日では、「自分の属する文化を超越する努力」をすることが必要であり、それは「安楽椅子に座っていてできることではない」と指摘した。ホールのいう文化を超える努力とは、相手の文化をより正確に知ろうとすることと、自分の文化をよく知ることである。相手文化のコンテクストを理解するだけでなく、「自分の文

化を操っている規則」を知ることが必要なのである。しかし、人は自文化の中では「自分の文化を操っている規則」を意識しない。従って、その規則を発見するためには、それを意識せざるを得ない場面、つまり、異文化の中に身を置くことが必要となる。異なる環境は人に自らを知る契機を与えるのである。

近代以降、異国の地に身を置き、そこで営まれる教育を対象とする研究が増えているが、その意義は次のような説明がなされる場合が多い。

まず、外国での調査や研究を通して対象となる国や民族の教育実態を明らかにし、理解を深め、根拠に基づいて解釈を行う「地域研究」の必要性である。こうした「地域研究」は、それ自体が学問的意義を持つと同時に、最終的にそれが教育本質への理解や法則の発見に寄与するプロセスとして、その意義が強調されるのである。

次は、前述の文脈から導き出される他者を通しての「自己理解」の視点である。諸外国の教育を知ることによって、今まで見えなかった自国の教育の特性や問題点について理解を深めることができる。比較を通して浮き彫りになった自らの問題点については、諸外国の教育から示唆を得、それを参考にして修正を加えたり、改善を図ったりするのである。

近年、異なる他者、異なる文化をどう位置付け、如何に扱うかを巡って新しい動きがみられるようになった。いわゆる「文化多様性」の視점에立脚した、異なる他者、異なる文化の新しい位置づけである。異なる他者は、もはや単なる理解と寛容の対象にとどまらず、「自らが存在するために必要不可欠な他者」への変化したのである。その根幹には、ある文化が生命力と創造力を保つためには他の文化が存在することが必要であるという考え方がある。ユネスコ広報部主席広報官を歴任した服部英二は「文明の核を形作る文化は、他文化の存在を要し、他者との絶えざる交信によって、新たな自己を形成していく。しかもそれは双方向でなされる。人類文明はこのような対話の中で成長してきた」とみる。新たな発想は、他の文化との出会いから生まれ、文化の創造力の源泉は異なる文化間の絶えざる交流の中にあるとするならば、他の文化は「自らの存在のための他者」であり、単なる異文化理解や寛容の対象に留まらないのである。人類の文明がそのような対話の中から生まれたのであるならば、「文化の画一化」は不毛の世界を招くことになる。

こうした異文化の位置づけは、ユネスコの「文化的多様性に関する世界宣言 (Universal Declaration on Cultural Diversity)」(2001年第31回ユネスコ総会で採択、以下「宣言」)以降、急速に広まった。当宣言は、文化の多様性を「世界の平和と安全を保証する最善策の一つ」として位置づけ、生物における種の多様性が「自然にとって不可欠である」のと同様に、文化の多様性は「人類にとって不可欠なもの」であるとして、その意義を強調している。環境考古学と動物考古学を専門とする内山純蔵は、「文化多様性」は「種としての人類の存続」に必要と指摘する。人類が環境の変化に適応していくためには、多様な文化が存在していた方が有利だという。人類は度重なる重大な地球環境の変化を、極めて柔軟に異なる文化を創出することで乗り越えてきた。例えば、人類は凡そ1万2千年前の氷河期終了に伴う環境変化に際して、旧石器時代の狩猟採集文化から脱して、定住集落、漁撈等の新しい技術と貯蔵等を特徴とする中石器時代の文化へ移行することで生き延びることが出来たのである。この中石器時代の文化というものは、環境の急変に際して突如現れたものではなく、すでに氷河期の時代から、少数でありながら一部の温帯地域で存在していたらしい。つまり、予め、多様な文化が共存していたことが、人類が環境変化を乗り越えた要因だった。異なる文化を生み出し、それを維持することは、将来の予測不可能な環境変化に適応するための可能性を用意することにつながるので、種としての人類の長期的な生存には必要だというのである。

一方、松本亮三は、生物学の視点から、地球という限られた空間において多文化が共生することは、人類の生存に多様な選択肢を与えるために不可欠だという。人類などの高等生物が有性生殖をするのは、個体の遺伝的構成を多様にすることで種の絶滅の危険性を回避することに寄与している。人類は文化をもつ生物であり、文化的多様性を保証することこそが人類存続の要であるというのである。このほか、言語学者の狩俣繁久は、世界中に拡散している生物の中で、遺伝学的な変種が一番小さい人間が遺伝的性質を変えず環境変化への適応に成功したのは、文化によるものと説明する。言語学者ニコラス・エヴァンズは、その著『危機言語一言語の消滅でわれわれは何を失うか』において「鳥や木の絶滅危惧種であろうと、忘れ去られようとしている文化知識の体系であろうと、あるいは消滅の危機に瀕した言語であろうと、およそ多様性の維持を正当とする主張は基本的に同じものである」とした上で、ダーウィン以

来の科学的な用語を用いて表現するならば、「品種こそが適応性の貯蔵庫である」と表現した。

ユネスコが後に持続可能な社会の構築を目指した社会各分野の課題に取り組むに当たって「文化多様性に配慮した開発のアプローチが鍵となる」としたことに象徴されるように、文化多様性は既に文化の領域に限定されない社会理念となりつつある。ユネスコは、文化の多様性は「人類共通の遺産」として「その重要性が認識され、主張されるべき」であり、急速に進むグローバル化を背景に異なる民族が「互いに共生しようとする意識」を持つこと、そして「調和の取れた形で相互に影響を与え合う環境」を確保することが必要不可欠であるとした。

クリスティーナ・ヒントン（Christina Hinton）によると、最近の神経科学や心理学の研究成果は、人間は「生まれつき基本的な共感能力」を備わっており、その共感能力は「他者の体験や感情を内在化することに関わり、他者への関心を持つという生得的な特質の根底を成す」ことを示唆するという。つまり、「他者への関心」は人間の「生物学的傾向」なのだ。その関心の対象が自分に似た者に偏ったり、胎内で聞いた言語をより好んだり、同じ民族の者を他の民族の者より好んだりするなど、幾つかの「不安材料」はあるが、適応可能性や可塑性を持つ人間の脳は、早期からの多文化環境を整えることによってそうした偏りを克服することは可能であり、「21世紀の学校は、他者への関心についてのコスモポリタンの倫理観の育成が求められる」とした。

文化の多様性はなぜ必要かに関する議論は必ずしも十分とはいえないし、とりわけ、文化多様性の保全に寄与する教育の在り方に関する探究は始まったばかりである。

ホールは、文化の発展は人間自身の進化より遥かに速いために、文化が人間の生活を分断し、人間を疎外する場合があるとみる。その循環を断ち切るためには、人間が文化を超えて人間に戻る必要があるという。ホールは「彼との関係で問題なのは、実は私自身なのだ」という信念から、文化を超える「困難な旅」の意義を強調したのである。外国や異民族を対象とした諸研究は、正に文化を超えて人間に戻る「困難な旅」かもしれない。

新刊の『アジア教育文化ジャーナル』において、その「困難な旅」の中から結実した文化多様性の保全に寄与できる多くの研究成果が発表されることを期待したい。